高齢者における排尿障害の実態について —老人ホームでのアンケート・面接調査—

東京医科歯科大学医学部泌尿器科 (主任: 大島博幸教授)

安藤 正夫 永松 秀樹 谷沢 晶子

塚本 哲郎 寺尾 俊哉 大島 博幸

東京都多摩老人医療センター泌尿器科

高 木 健太郎 安 島 純 一

東京労災病院泌尿器科

水 尾 敏 之

国立身体障害者リハビリテーションセンター泌尿器科

牛 山 武 久

A QUESTIONNAIRE SURVEY ON MICTURITION PROBLEMS AMONG INSTITUTIONALIZED ELDERLY

Masao Ando, Hideki Nagamatsu, Akiko Tanizawa, Toshiya Terao,

Tetsuro Tsukamoto and Hiroyuki Oshima

Department of Urology, Tokyo Medical and Dental University School of Medicine

Kentaro Takagi and Junichi Ajima

Department of Urology, Tokyo Metropolitan Tama Geriatric Hospital

Toshiyuki Mizuo

Department of Urology, Tokyo Rosai Hospital

Takehisa Ushiyama

Department of Urology, National Rehabilitation Center for the Disabled

Prevalence of micturition problems among 1,023 institutionalized elderly was surveyed by a questionnaire. The reply was obtained from 821 elderly (80.3%) including 276 males and 545 females with ages averaged 77 years (range 61 to 96 years). They had neither highly impaired performance status nor severe dementia.

Micturition problems were complained by 38% of male responders, where micturition difficulty was the most common. On the other hand, 23% of female responders answered having micturition problems and urinary frequency was the most common. One hundred and twenty-four of total responders (15%) replied to have urinary incontinence; 8% in men and 19% in women. Over half of patients with marked objective incontinence denied its presence or refused to answer. Seventy-one per cent of the incontinent elderly had no intention to receive medical care.

From the above facts, it seems that many elderly have micturition problems and the incidence of urinary incontinence is latently higher than complained at survey.

Key words: the elderly, urinary disturbance, urinary incontinence

要旨: 高齢者の排尿障害, 特に尿失禁の実態を把握する目的で, 老人ホーム入所者1,023名に対してアンケート・面接調査を行い821名から回答が得られた (回答率80.3%). 821名の内訳は男子276名, 女子545名で, 年齢は61~96歳, 平均77歳である。この中には, 寝たきり老人や高度の痴呆老人は含まれていない。

821名のうち、排尿障害を自覚している人が男子で38%、女子で23%に認められ、男子では排尿困難、女子では頻尿を訴える人が最も多かった。821名のうち尿失禁があると回答した人は124名、全体の15%で、男子の8%、女子の19%に認められた。明らかな尿失禁を抱えているにも拘らず、その存在を知られたくないという心理が半数以上の人に認められ、受療の意志のない人が71%に認められた。

以上、排尿障害を自覚している高齢者は予想以上に多く、尿失禁を抱える高齢者も潜在的に多いことが判明した。

キーワード：高齢者、排尿障害、尿失禁

緒 言

日本の社会は高齢化の方向に急速に移行している。高齢者の生活の質に大きな影響を及ぼす因子として痴呆、運動障害、排尿障害を挙げることができる。その中で尿失禁は高齢者の生活意欲を低下させ、ひいては運動障害や痴呆の発現を促進することが想定される。高齢者の尿失禁の原因としては神経因性膀胱、腹圧性尿失禁、前立腺肥大症や前立腺癌に対する治療の後遺症など、様々挙げられてはいる。しかし、本邦では尿失禁を含めた排尿障害の実態や病態生理を詳細に検討した報告はほとんどない。高齢者の抱える排尿障害の実態を把握して、その上で高齢者における排尿障害を病態生理学的に解析し、その対応策を確立することを目標として、老人ホームでの排尿障害に関するアンケート・面接調査を行った。それを分析した結果を報告し、高齢者における排尿障害の実態を考察する。

対象・方法

アンケート・面接調査の対象は、東京都多摩老人医療センターと同じ敷地内にある老人ホーム入所者である。この老人ホームは養護老人ホーム2棟、軽費老人ホーム1棟からなり、60歳以上の高齢者が身体的、家庭的あるいは経済的理由で入所している。視覚障害者を除けば身の周りのことは自分ででき、いわゆる寝たきり老人は入所していない。

視覚障害者を除いた1,024名に対して表1に示す項目を含むアンケート用紙を配布し、3～5日後に回収した。アンケートの回答が不備な者あるいはアンケートに協力してもらえなかった高齢者に対しては、後日医師が個人の部屋を直接訪問して、同じ内容の面接調査をお願いした。なお、調査は個人の意志を尊重しプライバシーには十分配慮して行った。

結 果

膀胱腫瘍による回腸導管造設者1名を除いた1,023名(男子362名、女子661名)の高齢者に対するアンケート調査の結果、619名より回答を得た。しかし、アンケートに対して十分な回答を寄せたのは343名しかなかった。

表1 高齢者の排尿に関する調査(第一次アンケート)

- (1) 排尿するときの状態はどうか。
1) スムースに出る ～ 9) その他
- (2) 寝てから朝起きるまで(夜間)に何回くらいトイレに行きますか。
1) 一回も起きない ～ 4) 5回以上
- (3) 朝起きてから夜寝るまで(日中)に何回くらいトイレに行きますか。
1) 5回以下 ～ 5) 12回以上
- (4) 普段の生活の中で排尿はどうしていますか。
1) トイレの便器で ～ 7) その他
- (5) 尿意(自然に尿が出たくなる感じ)はありますか。
1) ある 2) 何となくある 3) 全くない
- (6) 尿失禁(尿の漏れ)がありますか。
1) ない 2) ときどきある 3) 常にある
(6-1) 尿の漏れは次のどの状態でありますか。
1) 尿が出たくなったときに合わなくて ～ 7) その他
(6-2) 尿の漏れに対して、どのように対処していますか。
1) 市販の集尿器を使用 ～ 7) その他
(6-3) 尿の漏れは何年前からありますか。
1) 半年前 ～ 5) 4年以上前
(6-4) 尿失禁の治療について
1) 治療したい 2) 現在治療している 3) このままでよい

表2 アンケート・面接調査回答率

老人ホーム	総数	アンケート	面接	回答総数	回答率(%)
A (養護老人ホーム)	475	155	260	415	87.4
B (養護老人ホーム)	362	109	159	268	74.0
C (軽費老人ホーム)	186	79	59	138	74.2
計	1023	343	478	821	80.3

たため、アンケートの回答が不備な高齢者に対して補足面接調査を行い276名より回答を得た。同時にアンケートに協力してもらえなかった高齢者に対して個人面接調査をお願いした結果、さらに202名から回答を得ることができた。以上、1,023名の高齢者に対するアンケート・面接調査の結果、回答が得られたのは合計821名で回答率は80.3%であった(表2)。821名の内訳は男子276名、女子545名で、男子の76%、女子の82%から回答が得られた。年齢は61～96歳(平均77歳)であり、男女とも70歳代が最も多かった(図1)。

図1 アンケート調査回答者の年齢・性別分布 (821名)
[□:男子, ■:女子]

アンケート・面接調査に回答した821名の1日の排尿回数を検討すると、日中は男女とも6〜7回の例が半数近くあり、10回以上の例は男子で7%、女子で8%であった。一方、就寝時の排尿回数では男女とも1〜2回の例が6割近くを占め、3回以上の例は男子で34%、女子で30%と予想以上に多かった(図2)。821名の自覚的な排尿状態を表3に示す。男子では正常と答えた人は全体の62%で、何らかの症状を訴えた人は38%であった。その内容は出始めが遅い(20%)、排尿のキレが悪い(12%)、排尿に時間がかかる(10%)、尿線が途切れる(8%)などで、排尿困難症状を訴える例が多く、また頻尿を訴える例も全体の14%に認められた。

表3 自覚的な排尿状態(男子276名、女子545名)

自覚的な排尿状態	男子 (%)	女子 (%)
正常	170 (62)	417 (77)
出始めが遅い	55 (20)	29 (5)
排尿に時間がかかる	28 (10)	26 (5)
排尿のキレが悪い	32 (12)	10 (2)
尿線が途切れる	23 (8)	16 (3)
残尿感がある	1	2
尿線が細い	0	2
頻尿	38 (14)	75 (14)
尿意切迫感がある	14 (5)	30 (6)

表4 年齢別・性別の尿失禁出現率(%)

年齢	男子	女子	全体
60-69	8	16	12
70-79	6	19	14
80-89	11	20	18
90-96	14	7	10
計	8	19	15

一方、女子では正常と答えた人は全体の77%、何らかの症状を訴えた人は23%で男子より少なかった。異常を訴えたなかでは頻尿が14%と最も多く、次いで尿意切迫感(6%)で、排尿困難症状を訴えた例は男子と比較して少なかった。

821名の高齢者のうち尿失禁があると回答した人は124名(15%)であった。内訳は男子22名、女子102名で、調査に協力した男子の8%に、女子では19%に尿失禁があることが判明した。年齢別・性別による尿失禁出現率をみると、70歳代女子、80歳代女子がそれぞれ19%、20%と頻度が高かった(表4)。

図2 1日の排尿回数 (821名)

図3 尿失禁に対する治療希望の有無 (124名)

図4 他覚的尿失禁例の調査に対する反応 (25名)

尿失禁のある124名のうち尿失禁の治療を希望する者は23名(19%), 治療中の者11名(9%)で, 治療を希望せず現状のままで良いとする者が88名(71%)と圧倒的に多かった(図3)。なお, 寮母さんや同室者より尿失禁があると指摘された25名の今回の調査に対する態度をみると, 調査を拒否した人が6名(24%), 尿失禁はないと回答した人8名(32%)で, 56%の人が尿失禁の存在を知られたくないという心理が働いていることが判明し, 尿失禁問題の複雑な一面が窺えた(図4)。

考 察

一般の高齢者について排尿動態を詳細に検討した報告は本邦では見かけない。今回の調査では, ほぼ生活自立している高齢者男子の約1/3および女子の約1/4が自覚的に排尿障害症状のあることが判明した。男子では排尿困難症状が多いのに対し, 女子では頻尿を訴える例が多いことが特徴的であった。一方夜間就寝時の排尿回数が3回以上の例が男子で34%, 女子で30%と予想以上に多かった。この理由の一つとしては排尿障害の存在や加齢に伴う心機能や腎機能の低下に基づく夜間尿量の増加によることが想定されるが, ホームの就寝時間が比較的長く設定(午後9時~午前6時)されていることも考慮する必要がある。いずれにして

も, これら高齢者の大部分が排尿に関しては医療を受けていない点が今後の問題と考えられた。

本邦においても高齢者尿失禁問題が最近ようやくクローズアップされて来ているが, その実態を調査した報告は極めて少ない。今回の調査では男子の8%, 女子の19%に尿失禁を認めた。ある一地域の65歳以上の在宅高齢者3,960名を対象にした郵送調査¹⁾によれば, 回答した2,647名のうち8.5%(男子7.5%, 女子9.6%)に尿失禁を認め, 年齢階層が上につれ, またADLが低くなるにつれて尿失禁の出現頻度が高くなり, 尿失禁を抱える高齢者はそのない高齢者と比較して生命予後が有意に不良にあると報告されている。昭和62年に東京都で行われた, 都内在住の65歳以上の在宅高齢者を対象にした調査²⁾では2.8%に尿失禁を認めた。また同じ年に行われた都内の老人福祉施設入所高齢者での調査³⁾によれば, 養護老人ホームで11.7%, 軽費老人ホームで1.0~2.7%に尿失禁を認めたと報告されている。また特殊な母集団における尿失禁の頻度をみると, 老人病院の寝たきり老人では87.3%⁴⁾, 特別養護老人ホーム入所者では66.7%³⁾, リハビリテーション専門病院入院患者では32%⁵⁾と高率である。一方, 欧米ではかなり以前から高齢者尿失禁問題に関心が持たれ, 調査がなされているが, それによると在宅高齢者の尿失禁の頻度は5~33%^{6)~11)}, 老人ホーム入所者や老人病院入院高齢者では40~75%^{8)9)11)~13)}と報告者によりかなりばらつきがある。

今回の調査では尿失禁を治療中の人は9%, 治療を希望する人は19%のみで, 尿失禁を抱えながら受療の意志のない人が71%も認められた。欧米での尿失禁患者の受療率はイギリス10%, スウェーデン25%, オーストラリア30%, アメリカ50%と報告¹⁴⁾されている。また今回は, 尿失禁を抱えながら受療の意志のない原因を調査できなかったが, 欧米での調査¹⁴⁾によると, 尿失禁は加齢につきものだと思っている人77%, 放置しておくしかないと思っている人62%, 治療手段がないと思っている人51%, 恥ずかしいと感じている人30%, 外科的処置を恐れている人18%, どこへ行ってもわからない人16%であった。本調査で他覚的に尿失禁がありながら尿失禁なしと回答あるいは調査を拒否した例が合わせて半数以上あったことは, 本邦でも羞恥心, 諦め, あるいは「尿失禁=老化ないし痴呆」という通念から来る心理的抵抗など, 心理的要因が大きく働いていることが想定された。

結 語

老人ホーム入所高齢者の排尿障害、特に尿失禁の実態を把握する目的で、アンケート・面接調査を行い、以下の事実が判明した。

1) 調査に回答した高齢者821名（回答率80.3%）のうち、排尿障害症状を自覚している人が男子で38%、女子で23%に認められ、男子では排尿困難症状が多く、女子では頻尿を訴える例が多かった。

2) 821名のうち、尿失禁があると回答した人は124名、15%（男子8%、女子19%）であった。

3) 明らかな尿失禁を抱えているにも拘らず、その存在を知られたくないという心理が半数以上の人に認められ、受療の意志のない人が71%に認められた。

排尿障害を自覚している高齢者は予想以上に多い。また、尿失禁を抱える高齢者も潜在的に多いにも拘らず大多数の人は受療の意志がないことが判明した。その背景因子として排尿障害＝老化という想念からの諦めと、それを人に知られたくない心理が存在することが想定された。

本論文の要旨は第78回日本泌尿器科学会総会にて発表した。なお本研究の一部は笹川医学医療研究財団の補助金によった。

文 献

- 1) 古谷野 亘, 柴田 博, 芳賀 博, 須山靖男: 地域老人における失禁とその予後—5年間の追跡—. 日本公衛誌, 33, 11—16, 1986.
- 2) 東京都福祉局: 高齢者の生活実態及び健康に関する調査報告書 (昭和62年度). 1989.
- 3) 東京都福祉局: 老人福祉施設における入所者の健康実態調査報告書 (昭和62年度). 1989.

- 4) 上田昭一: 寝たきり老人の尿失禁の治療. 臨泌, 42, 603—608, 1988.
- 5) 小川秋實: 日本における老人の尿失禁. 第3回老人の失禁に関する国際シンポジウム抄録集, 1989.
- 6) Feneley, R.C.L., Shepherd, A.M., Powell, P.H. and Blannin, J.: Urinary incontinence: prevalence and needs. Brit. J.Urol., 51, 493—496, 1979.
- 7) Thomas, T.M., Plymat, K.R. Blannin, J. and Meade, T.W.: Prevalence of urinary incontinence. Brit. M.J., 281, 1243—1245, 1980.
- 8) Rowe, J.W.: Health care of the elderly. N. Engl. J.Med., 321, 827—835, 1985.
- 9) Consensus conference: Urinary incontinence in adults. JAMA, 261, 2685—2690, 1989.
- 10) Diokno, A.C., Brock, B.M., Brown, M.B. and Herzog, A.R.: Prevalence of urinary incontinence and other urological symptoms in the noninstitutionalized elderly. J. Urol., 136, 1022—1025, 1986.
- 11) Turpie, I.D. and Skelly, J.: Urinary incontinence: current overview of a prevalent problem. Geriatrics, 44, 32—38, 1989.
- 12) Ouslander, J.G., Kane, R.L. and Abrass, I.B.: Urinary incontinence in elderly nursing home patients. JAMA, 248, 1194—1198, 1982.
- 13) Resnick, N.M., Yalla, S.V. and Laurino, E.: The pathophysiology of urinary incontinence among institutionalized elderly persons. N. Engl. J. Med., 320, 1—7, 1989.
- 14) Hollo, A.: スウェーデンの尿失禁対策. 高齢者の頻尿・尿失禁研究会抄録, Medical Tribune, 1989.

(1990年12月18日受理)